

マリ語 *марий йылме, мары йылмы*, 英 *Mari*, 独 *Mari, Marisch*, 仏 *mari*, 露 *марийский язык*
 ウラル語族, フィン・ウゴル語派の中のボルガ諸語とよばれるグループに属する言語。1989年のソ連邦の国勢調査では, 67万1千人のマリ人の81%にあたる54万2千人がマリ語を母語として, 2万3千人が自由に話せる第2言語として申告している。

ソ連邦以外の研究者の間では, 「チェレミス語(*Cheremis*)」という言い方が一般的に用いられるが, ソ連邦では, マリ人自身が用いている呼称に基づく「マリ語」が公式の言い方である。民族の自称「マリ(марий, мары)」は, 「夫」の意味があるほか, 古くは, 広く「男, 人間」の意味で用いられた語で, インド・ヨーロッパ語(インド・イラン語派)からの借用語とされている(cf. サンスクリット *marya*-「男, 若い男」)。

マリ人の住んでいる地域は, ボルガ(Волга)川の中流左岸のマリ自治共和国(Марийская АССР)とその周辺, および, バシキール自治共和国(Башкирская АССР)の北部とその周辺である(図1を参照)。居住地域別にマリ人の数をみると, マリ自治共和国30万人, バシキール自治共和国10万人, キーロフ州(Кировская область)5万人などとなっている。

マリ語には, 方言差に基づく2つの文語(便宜上, 東マリ語, 西マリ語とよぶ)がある(「方言区分と文語」を参照)。マリ語の構造に関する以下の記述は, 特に断わりのない限り, 東マリ語に関するものである。

[音と文字] マリ語は, ロシア文字によって表記されるが, ロシア字母にない文字 *ä, ö, ý, ÿ, н* が

用いられる。ただし, *ä, ÿ* は, 西マリ語でのみ用いられる文字である。

母音音素は, /a, e, i, o, ö/ (円唇前舌中母音), u, ü (円唇前舌高母音), ə/ の8つである。母音は, 強勢の有無により少し音価が変わり, 特に, 強勢のある母音は, 一般に, 強勢のないものより長く発音されるが, 音韻論的な母音の長短の区別はない。強勢のある母音が, 1) /o, u/, 2) /ö, ü/, 3) /a, e, i, ə/ のいずれであるかにより, 接尾辞の母音が, /o~ö~e/ という交替をする, 一種の母音調和がある。

поч-мо ~ пүч-мө ~ печы-ме (それぞれ, *почаш* 「開く」, *пүчкаш* 「切る」, *печаш* 「困う」) の分詞形の一つ)

正書法では, /e/ は, e または э で, /ö, ü, ə/ は, それぞれ, ö, ü, ы で表記される。

比較的新しい(ロシア語からの)借用語を除くと, 子音音素は, /p, t, k, b, d, g, s, š(=ʃ), z, ž(=ʒ), č(=tʃ ないし ʧ), r, l, j, m, n, ŋ, l'(=l), ř(=r̄)/ である。/b, d, g/ は, /mb, nd, ŋg/ という環境以外では, 普通, 摩擦音 [β] [ð] [ɣ] となる。正書法上, /b/ は в (ただし м の後ろでは б) で, /ŋ/ は н で表記される。я, ю は, 一般に, /ja, ju/ を表わすが, ня, ню, ля, лю では, 子音の口蓋化 /ńa, ŋu, l'a, l'u/ を表わす。正書法の e は, 語頭および母音の後ろでは /je/ を表わすが, 子音の後ろでは /e/ を表わす。したがって, /ne/ と /ńe/, /le/ と /l'e/ は, いずれも, не, ле と表記され, 子音の口蓋化は, 正書法上, 区別されない。その他の場合, /ń/ と /l'/ は, нь, ль と書かれる。

比較的新しい(ロシア語からの)借用語を除くと, マリ語の語強勢の位置は, 次のような規則によって与えられる。

1) 最終音節の母音が, /a, i, u, ü/ ならば, 強勢は最終音節にある。

пашá 「仕事」, марий 「マリ人」, пасú 「畑」

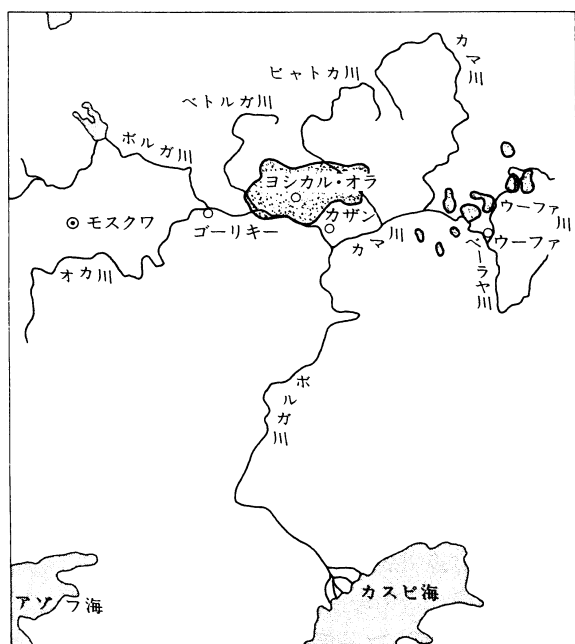
2) 最終音節の母音が, /o, e/ の場合, a) 最終音節が閉音節であるか, b) 最終音節が開音節でも, その母音が /ə/ と交替しない /o, e/ ならば, 強勢は最終音節にある。

возém 「私は書く」, куэ́ 「白樺」, покрó 「雑草の名」

3) 最終音節の母音が, 1, 2 のいずれにもあてはまらない場合は, /ə/ 以外の母音を含む音節のうちで, 最終音節にもっとも近い音節に強勢がある。
 кóрно 「道」, тúныктышо 「教師」, кенéжым 「夏に」

4) 上記3つの規則で強勢が与えられない場合(すべての母音が /ə/ の場合) は, 第1音節に強勢が

〈図1〉 マリ語の話されている地域



おかれる。

ЫШТЫШЫМ 「私は作った」、ПЫСТЫЛЖЫМ 「彼のペンを」

[語形変化と語の構造]

I) 名詞 名詞の語形変化のカテゴリーは、数、人称、格である。

名詞の数は、単数と複数で、単数は標識がない。複数を標示する接尾辞は、-влак (または、-шамыч) と -ла であり、後者は、それが使われる名詞、および、それに付くことができる格語尾に制限があるが、前者の方は、広く用いられる。-влак と -шамыч の2つの形は、方言的背景の違いに由来し、-влак の方が、今日では一般的である。マリ語では、手、目、耳などのように、常に対になっているものは単数形で言及され、どちらか一方を表わす場合は、「半分の～」という言い方がされる。

кид 「手」～ пел кид 「片手」

また、「～たち」「～とその仲間」という意味の複数を表わす接尾辞がある。

Пөдыр 「ヒョードル」～ Пөдырмыт 「ヒョードルたち」

名詞には、その所有関係、所属関係を表わす所有接尾辞 (possessive suffix) が付くことができる。所有接尾辞の体系は、人称代名詞の体系に対応する(表1)。

<表1> マリ語の人称代名詞と対応する所有接尾辞 (例: кид 「手」)

	人称代名詞	所有接尾辞
1 人称単数	мый	-ем/-эм ~ -м кидем 「私の手」
	複数	ме кидна 「われわれの手」
2 人称単数	тый	-ет/-эт ~ -т кидет 「あなたの手」
	複数	те кидда 「あなたたちの手」
3 人称単数	тудо	-(ы)же/-(ы)жо/-(ы)жө ~ -ше/-шо/-шө кидше 「彼(彼女)の手」
	複数	нуно - (ы)шт кидышт 「彼(彼女)らの手」

名詞の格の数は、学者によって、形態格の認定のしかたが統一されておらず、定説があるとはいえないが、もっとも最近の見解として、9つの格を認める考えがある(Учаев, 1982; 表2を参照)。

それぞれの格語尾をとり出すと、次のようになる。

- 1) 主格:ゼロ
- 2) 属格: -н ~ -ын

<表2> マリ語の名詞 кид 「手」の格変化

	単数	複数
主格 「手」	кид	кид-влак
属格 「手の」	кид-ын	кид-влак-ын
与格 「手に対して」	кид-лан	кид-влак-лан
対格 「手を」	кид-ым	кид-влак-ым
様格 「手のように」	кид-ла	кид-влак-ла
共格 「手とともに」	кид-ге	кид-влак-ге
内格 「手の中で」	кид-ыште	кид-влак-ыште
入格 「手の中へ」	кид-ышке	кид-влак-ышке
向格 「手の中で」	кид-еш	кид-влак-еш

- 3) 与格: -лан
- 4) 対格: -м ~ -ым
- 5) 様格 (сравнительный, comparative): -ла
- 6) 共格 (совместный, comitative): -ге
- 7) 内格 (местный, inessive): -ште/-што/-штö
~ -ыште/-ышто/-ыштö
- 8) 入格 (направительный, illative): -ш(ке)/-ш(ко)/-ш(кө) ~ -ыш(ке)/-ыш(ко)/-ыш(кө)
- 9) 向格 (обстоятельный, lative): -еш ~ -ш
内格(静止位置)と入格(到達点)に対応して、起点(「～の中から」)を表わす場合には、後置詞 гыч が用いられる。

пöрт 「家(建物)」～ пöртыштö 「家の中で」～ пöртышкө 「家の中へ」～ пöрт гыч 「家の中から」
向格は、出現や状態変化を表わす動詞とともに用いられて、その場所や状態を示す。

мөнгө 「うち、家」～ мөнгеш кодаш 「家にとどまる、家に残る」
кагаз 「紙」～ кагазеш сүретлаш 「紙(の上)に描く」

場所関係でも、「～のところへ/もとへ」(入格に対応)、「～のところから/もとから」(гыч に対応)は、それぞれ、後置詞 деке, деч で表わされる。なお、形態上は、деке, деч と組になって、内格に対応する дене は、意味上は、「～とともに」「～によって」となるのが普通で、前二者と厳密に対応していない。

Пөдыр деке 「ヒョードルのところへ」～ Пөдыр деч 「ヒョードル(のところ)から」～ Пөдыр дене 「ヒョードルと」

сер 「岸」～ сер деке 「岸(の方)へ」～ сер деч 「岸から」

複数標識、所有接尾辞、格語尾の語中の順序関係は、次のようになる。

- 1) 所有接尾辞は、内格、入格、向格では、格語尾の後に、その他の格では、格語尾の前に現われる。
книга 「本」～ книга-м-ын 「私の本の」～ книга-

шт-ем「私の本の中で」

2) 複数の -влак は、格語尾の前に現われる。

книга-влак-ын「本(複)の」

книга-влак-ыште「本(複)の中で」

3) 所有接尾辞は、複数の -влак の前に現われる。

ただし、内格、入格、向格の場合は、格語尾の後でもよい。

книга-м-влак「私の本(複)」

книга-м-влак-ын「私の本(複)の」

книга-м-влак-ыште ~ книга-влак-ышт-ем「私の本(複)の中で」

疑問代名詞は、кө「誰」、мо「何」、再帰代名詞は、шкеである。

数詞を、表3に示す。数詞の体系は10進法で、20, 30等々は2×10, 3×10等々と、23, 35等々は20+3, 30+5等々と表わされる。11~19のлат-は、数詞лу「10」に、並列の小詞-атが付いたものである(лу+ат->лат-)。

II) 動詞 動詞は、人称代名詞の表わす6つの人称カテゴリーに従って活用する。法(наклонение)

〈表3〉 マリ語の数詞

1	ик	10	лу	11	латик
2	кок	20	коло	12	латкок
3	кум	30	кумло	13	латкум
4	ныл	40	нылле	14	латныл
5	вич	50	витле	15	латвич
6	куд	60	кудло	16	латкуд
7	шым	70	шымлу	17	латшым
8	кандаш	80	кандашлу	18	латкандаш
9	индеш	90	индешлу	19	латиндеш
100	шүдö	1,000	түжем		
23	коло кум	35	кумло вич		

〈表4〉 マリ語の動詞の第1活用(лудаш「読む」)

		直説法現在	直説法過去 I	直説法過去 II	願望法	命令法
〔肯定形〕	単数	1 лудам「読む」	лудым「読んだ」	лудынам「読んだ」	луднем「読みたい」	—
		2 лудат	лудыч	лудынат	луднет	луд「読め」
		3 лудеш	лудо	лудын	луднеже	лудшо
	複数	1 лудына	лудна	лудынна	луднена	—
		2 лудыда	лудда	лудында	луднеда	лудса
		3 лудыт	лудыч	лудыныт	луднешт	лудышт
〔否定形〕	単数	1 ом луд	шым луд	лудын омыл	ынем луд	—
		2 от луд	шыч луд	лудын отыл	ынет луд	ит луд
		3 ок луд	ыш луд	лудын огыл	ынеж луд	ынже луд
	複数	1 она луд	ышна луд	лудын онал	ынена луд	—
		2 ода луд	ышда луд	лудын одал	ынеда луд	ида луд
		3 огыт луд	ышт луд	лудын огытыл	ынешт луд	ынышт луд

として、直説法(изъявительное)、願望法(желательное)、命令法(повелительное)、仮定法(условно-сослагательное)の4つが区別される。直説法には、現在(あるいは、「現在・未来」)、過去 I、過去 II の3つの形がある。

活用語尾の点で、動詞は、2つの活用型に分かれる。2つの活用型は、たとえば、直説法現在1人称単数の語尾が-амとなる(第1活用: лудам「私は読む」)か、-емとなる(第2活用: возем「私は書く」)かで区別される。

動詞には、不定詞が2つあるとされる。1つは、-ашで終わる形で、辞書の見出し形として用いられる。

лудаш「読む」、возаш「書く」

もう1つの不定詞は、-манで終わる形である。

лудман「読まなければならない」、возыман「書かななければならない」

動詞の活用を、第1活用の動詞 лудаш「読む」を例にとって、表4に示す。

直説法の過去 I と過去 II の違いは、主としてアスペクトの問題で、前者が過去のできごとを完結的にとらえる言い方なのに対し、後者は、できごとが発話の時点にまで影響を及ぼしている点においてとらえる言い方である。直説法過去 I は、第1活用の動詞では、現在形の語幹に、直接、人称語尾が付いてできるが、第2活用の動詞では、標識 -ш- が現われる。

лудам「私は読む」: лудым「私は読んだ」

возем「私は書く」: возышым「私は書いた」

直説法現在、直説法過去 II、願望法の各形には、小詞 ыле(または、улмаш)が付くことができる。直説法現在 + ыле(улмаш)は、過去のあるできごとと同時に起こっていたことを、直説法過去 II + ыле(улмаш)は、過去のあるできごとより以前に起こった(大過去)ことを表わす。また、願望法 + ыле(улмаш)の

場合は、過去の願望「したいと思った」になる。ただし, ыле は、直接に経験したことについて, улмаш は間接的な経験(伝聞)について用いられる。なお, 直説法現在形+ыле は、このほかに、実際には起こらなかったことについて用いられることがあり、この場合には、仮定法とよばれる。

マリ語の動詞の否定形は、否定動詞を用いてつくられる。この際、人称、法、時制の標識が現われるのは、否定動詞の方で、本動詞は、通常、語幹のまま現われる(表4)。

副動詞(деепричастие)として5つ、分詞(形動詞, причастие)として4つの形をたてるのが普通である(表5)。副動詞と分詞の語尾をとり出すと、次のようになる。

〈副動詞〉

- | | |
|----------------|---------|
| 1) -ын/-ен/-эн | 「～して」 |
| 2) -де | 「～しないで」 |
| 3) -мек(е) | 「～してから」 |
| 4) -меш(ке) | 「～するまで」 |
| 5) -шыла | 「～しつつ」 |

〈分詞〉

- | | |
|----------------------|---------|
| 1) -ше/-шо/-шö | (шE 分詞) |
| 2) -ме/-мо/-мö | (ME 分詞) |
| 3) -дыме/-дымо/-дымö | (否定分詞) |
| 4) -шаш | (未来分詞) |

〔文の構造〕 マリ語の文における基本的語順は、「主語-その他の成分-動詞」で、自動詞文、他動詞文のいずれの場合も、主語は主格で表示され、直接目的語は対格で表示される(文例1a, 1b)。マリ語は、後置詞言語である(2d)。形容詞修飾語(2a)、属格名詞句(2b)、数詞(2c)、および、後置詞句修飾語(2e)は、いずれも名詞の前に現われる。比較の構文において、比較の基準は、後置詞 деч によって表わされ、形容詞(の比較級)の前におかれる(3)。

存在文の語順は、普通、「場所-存在物-ある/ない」という構造になる(4a)。所有文は、「所有者(属格)-被所有物-ある/ない」という構造をしているが、被所

〈表5〉 マリ語の副動詞と分詞

лудын	単純副動詞	「読み、読んで」
лудде	否定副動詞	「読まず、読まないで」
лудмеке	完了副動詞	「読んでから」
лудмешке	未然副動詞	「読むまで」
лудшыла	進行副動詞	「読みながら」
лудшо	шE 分詞	「読む(ところの)」(主語)
лудмо	ME 分詞	「読む(ところの)」(主語以外)
луддымо	否定分詞	「読まない(ところの)」
лудшаш	未来分詞	「読むだろう(ところの)」

有物を表わす名詞に、所有者と人称、数を同じくする所有接尾辞が付く(4b)。

疑問詞を用いない疑問文は、通例、イントネーションだけで平叙文と区別されるが、多くの場合、疑問文に特有の小詞が現われる(5a, 5b)。疑問詞を用いた疑問文は、文の成分のどれかを疑問詞でおきかえることによってつくられる。疑問詞の、文頭への義務的移動はない(6a, 6b)。

マリ語では、使役を表わす派生動詞(接尾辞 -ыкт-)によって使役文をつくる。他動詞から派生した使役動詞の場合、使役の対象は、一般に与格になる(7b)が、自動詞からの派生の場合、一般に対格になる(8b)。

マリ語では、受身は、使役の場合とは異なり、はっきりとした構文論的概念であるとはいえないが、接尾辞 -алт- によって派生される動詞を、便宜上、「受身動詞」とよんで、-ыкт- によって派生される使役動詞と対比させることができる(9b)。この意味での受身文には、後置詞 дене(意味、用法の点で、英語の with によく似ている)をもつ成分が現われることがある。この後置詞句は、普通、手段ないし道具を表わし(10b)、まれに、その句を主語とする能動文を対応させることができる場合(10a)でも、動作主(agent)を表わすことはない。実際、能動文の主語が、厳密な意味での動作主である場合には、対応する受身動詞による受身文は不可能であり、(11)のように、語順を変えて、目的語を主題の位置においた能動文を用いることによって、受身に相当する内容を表現することになる。受身に相当すると考えられる構文には、このほかに、述語動詞を ME 分詞の形にする構文がある(12a, 12b, 12c)。この構文には、主語にあたる名詞句は現われず、したがって、目的語が、対格の代わりに主格で表わされることがある(12a)。また、述語動詞が3人称複数形の、主語のない文(9a)も、受身に相当する内容を表わすことができる。

マリ語の従属節は、普通、動詞の分詞形(13, 14, 15, 16)または副動詞形(17)を用いてつくられる。もっとも一般的なものは、ME 分詞を用いる場合で、分詞はさまざまな格語尾をとることができる(主格—13a, 13b; 対格—14a, 14b; 与格—15)ほか、後置詞を伴うこともできる(16)。従属節の主語は、一般に属格の語尾をとり、分詞、副動詞には、主語と、数、人称を同じくする所有接尾辞が付けられる。

マリ語では、関係節が動詞の分詞形によってつくられる。関係節は、主名詞の前に現われる。関係節化される名詞句が主語にあたる場合と、それ以外の名詞句である場合とでは、用いられる分詞が異なり、前者には шE 分詞(18b)、後者には ME 分詞(18c, 18d)が現われる。後者の場合、関係節の主語の名詞句は、普通、

〈文例〉 マリ語の文の構造

- | | | |
|--------|---|----------------------------|
| 1. a. | Пӧдыр кино-шко кая.
ヒョードル 映画(入格) 行く(3単現) | 「ヒョードルは映画に行く」 |
| b. | Пӧдыр книга-м лудеш.
ヒョードル 本(対格) 読む(3単現) | 「ヒョードルは本を読む」 |
| 2. a. | мотор ўдыр
美しい 娘 | 「美しい娘」 |
| b. | ўдыр-ын лўм-жӧ
娘(属格) 名前(3単) | 「娘の名」 |
| c. | кок ўдыр
2 娘 | 「2 人の娘」 |
| d. | ўдыр деч
娘 から | 「娘から」 |
| e. | марий йылме нерген книга
マリの 言語 ~について 本 | 「マリ語に関する本」 |
| 3. | Йошкар-Ола Козьмодемьянск деч кугу-рак.
ヨシカルオラ コジモデミヤンスク から 大きい(比較級) | 「ヨシカルオラは コジモデミヤンスク より 大きい」 |
| 4. a. | Ола-ште метро уло (уке).
町(内格) 地下鉄 ある(ない) | 「町には地下鉄がある(ない)」 |
| b. | Мый-ын яра жап-ем уло (уке).
私(属格) 空の 時間(1単) ある(ない) | 「私は暇がある(ない)」 |
| 5. a. | Тый толат <u>мо?</u>
あなた 来る(2単現) | 「あなたは来ますか」 |
| b. | <u>Ала</u> тый кает?
あなた 行く(2単現) | 「あなたは行くのでしょうか, たぶん?」 |
| 6. a. | <u>Кӧ</u> кино-шко кая?
誰 映画(入格) 行く(3単現) | 「誰が映画へ行きますか」 |
| b. | Пӧдыр <u>мо-м</u> лудеш?
ヒョードル 何(対格) 読む(3単現) | 「ヒョードルは何を読んでいますか」 |
| 7. a. | Йыван омса-м поч-еш.
イワン ドア(対格) 開く(3単現) | 「イワンがドアを開ける」 |
| b. | Пӧдыр Йыван-лан омса-м поч-ыкт-а.
ヒョードル イワン(与格) ドア(対格) 開かせる(3単現) | 「ヒョードルがイワンにドアを開けさせる」 |
| 8. a. | Орва пӧрд-еш.
輪 回転する(3単現) | 「輪が回る」 |
| b. | Пӧдыр орва-м пӧрд-ыкт-а.
ヒョードル 輪(対格) 回転させる(3単現) | 「ヒョードルが輪を回す」 |
| 9. a. | Тиде йўк-ым пушкыдын калас-ат.
この 音(対格) 軟らかく 言う(3複現) | 「この音は口蓋化して発音される」 |
| b. | Тиде йўк пушкыдын калас-алт-еш.
この 音 軟らかく 言われる(3単現) | 「この音は口蓋化して発音される」 |
| 10. a. | Мланде лум дене девед-алт-еш.
大地 雪 で 覆われる(3単現) | 「大地が雪に覆われる」 |
| b. | Пычал дене лўй-алт-ам.
銃 で 撃たれる(1単現) | 「私は銃で撃ち殺される」 |
| 11. | Пӧрт-ым плотник-влак чоң-ат.
家(対格) 大工(複数) 構築する(3複現) | 「家を大工たちが建てる」 |
| 12. a. | Йомак моткоч устан чоңы-мо.
物語 非常に 巧みに 構築する(ME 分詞) | 「物語は非常に巧みに組み立てられている」 |
| b. | Потолок-ым пеш сайын ошемды-ме.
天井(対格) 大変 よく しっくいを塗る(ME 分詞) | 「天井は大変みごとにしっくいが塗られた」 |

- c. Газет-ыште марий йылме нерген возы-мо. 「新聞にマリ語のことが書かれている」
新聞(内格) マリの言語 について 書く(ME分詞)
13. a. [Йоча-м-ын тўнө шорт-мы-жо] шокта.
子供(1単・属格) 外で 泣く(ME分詞・3単) 聞こえる(3単現)
「私の子供が外で泣いているのが聞こえる」
- b. [Тиде йомак-ын кузе шоч-мы-жо] пале огыл.
この 物語(属格) どのように 生まれる(ME分詞・3単) 明らか ない
「この物語がどのようにして生まれたかは明らかでない」
14. a. [Ача-м-ын пөлем-ышке пуры-мы-жы-м] ужым (вучышым).
父(1単・属格) 部屋(入格) 入る(ME分詞・3単・対格) 見る(1単過I)(待つ(1単過I))
「私は父が部屋に入るのを見た(待った)」
- b. [Йыван-ын тенгече кушко мийы-мы-жы-м] йодым (палышым).
イワン(属格) 昨日 どこへ 行く(ME分詞・3単・対格) 質問する(1単過I)(知っている(1単過I))
「イワンがきのうどこへ行ったか私はたずねた(知っていた)」
15. [Тыге ышты-м-ет-лан] суд-ышко пуэм.
このように する(ME分詞・2単・与格) 法廷(入格) 与える(1単現)
「あなたがこんなことをしたので、裁判所に訴えます」
16. [Марий йылме нерген йод-м-ем] годым Пётыр пурен
マリの 言語 ~について 質問する(ME分詞・1単) ~のとき ピョートル 入って(副動詞)
шогале.
立つ(3単過I)
「私がマリ語について質問しているときピョートルが入って来た」
17. a. [Пөдыр-ын кол-мекы-же] мый туды-н книга-жы-м печатлаш
ヒョードル(属格) 死ぬ(完了副動詞・3単) 私 彼(属格) 本(3単・対格) 印刷する(不定詞)
ямдыленам.
準備する(1単過II)
「ヒョードルがなくなってから私は彼の本を出版できる形にした」
- b. [Паспорт-ым нал-мешк-ем] Пётыр дене ылышым.
旅券(対格) 取る(未然副動詞・1単) ピョートル ~と 生きる(1単過I)
「旅券を受けとるまで、私はピョートルのところにやっかいになった」
18. a. Йыван тиде пөлем-ыште тыланет кужу серыш-ым возен колтен.
イワン この 部屋(内格) あなた(与格) 長い 手紙(対格) 書いて 送った(3単過II)
「イワンはこの部屋であなたに長い手紙を書いて送った」
- b. [тиде пөлем-ыште тыланет кужу серыш-ым возен колты-шо] Йыван
この 部屋(内格) あなた(与格) 長い 手紙(対格) 書いて 送る(шE分詞) イワン
「この部屋であなたに長い手紙を書いて送ったイワン」
- c. [Йыван-ын тиде пөлем-ыште тыланет возен колты-мо] кужу серыш-ыже
イワン(属格) この 部屋(内格) あなた(与格) 書いて 送る(ME分詞) 長い 手紙(3単)
「イワンがこの部屋であなたに書いて送った長い手紙」
- d. [Йыван-ын тыланет кужу серыш-ым возен колты-мо] пөлем-ыже
イワン(属格) あなた(与格) 長い 手紙(対格) 書いて 送る(ME分詞) 部屋(3単)
「イワンがあなたに長い手紙を書いて送った部屋」
19. a. [Школ-ышто лият] гын, тый шуко пайда-м ыштен кертат.
学校(内格) いる(2単現) もし あなた たくさん 利益(対格) つくって ~ことができる(2単現)
「あなたは学校へ行けば、利益をいっぱい得ることができる」
- b. [Йыван тенгече кушко миен] манын йодым.
イワン 昨日 どこへ 行った(3単過II) と 質問する(1単過I)
「イワンはきのうどこへ行ったのかと私はたずねた」
20. a. [Кө-м вучышна,] тудо толын.
誰(対格) 待つ(1複過I) 彼 来る(3単過II)
「私たちが待っていた人がやって来た」

〈表 6〉 東マリ語と西マリ語の音形上の違い

東マリ語	西マリ語	
ак	ăк	「値段」
ме (мэ)	mă	「わたしたち」
сер (сэр)	сир	「岸」
вич	vıç	「5」
мо	ma	「何」
поро	пуры	「良い」
кугу	кого	「大きい」
лум	лым	「雪」
тудо	тыды (тыды)	「彼」
лұм	лұм	「名」
йұр	юр (йур)	「雨」
ныл	ныл	「4」
кө	кү	「誰」

〈表 7〉 東マリ語の動詞 лудаш「読む」と西マリ語の лыдаш「読む」の、直説法過去 II の否定形「読まなかった」の比較

	東マリ語	西マリ語
単数	1 лудын омыл	лыдделам
	2 лудын отыд	лыдделат
	3 лудын огыл	лыдде
複数	1 лудын онал	лыдделна
	2 лудын одал	лыдделда
	3 лудын огытыл	лыдделыт

〈表 8〉 東マリ語と西マリ語の語彙の違い

東マリ語	西マリ語	
вашкүзө	кайыц	「はさみ」
канде	симсы (симсы)	「青い」
күсле	кәрш	「ロシア琴」
наринче	сары	「黄」
ойлаш	попаш	「話す」
пырыс	коти	「ねこ」
сай	яжо	「良い」
санга	лепка (лепкă)	「ひたい」
шагал	чбыды (чбыды)	「少ない」
шинчпун	хал	「まゆ毛」
шыл	пай	「肉」
шыргыжаш	ййраш (ййраш)	「微笑む」

法過去 II の否定形は、東マリ語では、語尾 -ын/-ен/-эн の副動詞をもとにしてつくるのに対し、西マリ語では、否定を表わす語尾 -де の副動詞からつくられる(表 7)。東マリ語と西マリ語の間には、表 8 のような語彙の違いもみられる。

【歴史】 マリ民族は、伝統的に、大きく「牧地マリ (олык марий)」と「山地マリ (курык марий)」

の 2 つの「部族」に分けられる。この区別は、そのまま 2 大方言である牧地方言と山地方言の対立の反映でもあり、したがって、東マリ語、西マリ語という 2 つの文語の存在の基盤になっている。牧地マリと山地マリの区別は、すでに、15～16 世紀には確立していたと考えられている。他方、「東マリ (эрвел марий)」あるいは「東方言」の成立は、比較的最近のもので、ロシア民族の東方への勢力拡大にともなう、政治的、宗教的圧力のために、16 世紀ごろから断続的に東方へ移住をした、牧地マリの集団にその起源をもつ。このため、東方言は、牧地方言に比較的近い。東マリ語が、「牧地・東マリ文語」とよばれるのは、東マリ語の成立に、牧地方言だけでなく、東方言の要素も関与しているためである。

ボルガ中流域に住むマリ民族は、近隣のチュワシ人 (8 世紀以降) やタタール人 (13 世紀半ば以降) と古くから交わっており、このため、マリ語には、チュワシ語やタタール語の影響が、特に語彙の面で色濃くみられるほか、シンタクスにおいても、チュワシ語の影響がしばしば主張される (→チュヴァシュ語)。16 世紀半ばにカザン汗国が崩壊してからは、ロシア民族の支配下に入り、以後、マリ語には、ロシア語の影響がみられるようになった。ロシア語の影響は、ロシア革命以後、特に著しい。

マリ語の文語の歴史は、1) 18 世紀～1860 年代、2) 1870 年代～1910 年代、3) 1920 年代以降、の 3 つの時期に分けて考えることができる。

第 1 期は草創期で、マリ語で書かれたものや、マリ語の文法などが現われはじめる時期である。マリ語のテキストとしてもっとも古いものは、オランダの旅行家兼地理学者のフィッツェン (N. Vitsen) が、1705 年に出した本の中におさめられているマリ語の祈禱文であるとされている。18 世紀には、このほかにも、何人かの外国人旅行家、探検家が、マリ語の単語を書きとったものを残している。中でも、ミュラー (G. F. Müller) のもの (1758) は、約 300 語の単語を含み、資料としての価値も高い。この時代は、また、ボルガ中流域でのロシア正教の布教活動が活発化し、それにとともに、宣教師たちによる、この地域の諸民族の言語の研究も盛んに行なわれるようになった。1775 年には、主として、牧地方言に基づいたマリ語の最初の文法 (*Сочинения принадлежащія къ грамматикѣ черемисскаго языка*) が、ペテルブルクの帝国アカデミーから出版される。この文法は、名詞と動詞の語形変化のみを扱ったものであるが、ロシア字母を用いた表記法の音声学的な信頼度はかなり高い。品詞ごとに並べられた、約 1 千語の語彙集が付けられている。

マリ語の本が出はじめるのは、19 世紀に入ってから

である。1804年と1808年に、教理問答集(カテキズム)が、ともに、モスクワで出されているが、前者は牧地方言で、後者は北西方言と考えられる方言で書かれている。1821年には、ペテルブルクから、山地方言の福音書が出された。マリ語を母語としない宣教師たちの手によるものであるために、これらの本に使われているマリ語は、はなはだ不完全なものであった。1837年に、カザン(Казань)で出された、アリビンスキー(Андрей Альбинский)の『チェレミス語文法』(Черемисская грамматика)は、当時としては、異例の1,200部が刷られて、教科書として用いられたので、マリ語の規範の成立に大きく貢献した。この文法は、山地方言に基づいている。ガーベレンツ(H. C. von der Gabelentz, 1840~93, ドイツ)、カストレーン(M. A. Castrén, 1813~52, フィンランド)、ビーデマン(F. J. Wiedemann, 1805~87, エストニア)、ブデンツ(J. Budenz, 1836~92, ハンガリー)など、外国の言語学者たちによるマリ語の本格的な言語学的研究がはじまるのも、ちょうどこの時期である。

1870年ごろから、マリ語による出版活動が活発になり、宗教書の翻訳はもとより、子供のための初等教本(いわゆる букварь)が数多く出版されるようになる。出版活動の中心はカザンで、マリ人が翻訳を行なうようになるのも、第2期の特色である。また、今日の正書法で用いられる ö, ý, ы, н は、このころに導入された。

初等教本が最初に出されたのは1867年で、以後、牧地、山地、東の3大方言用の初等教本が、何度も出されている。この時期の辞書としては、バシリエフ(Ф. Васильев)の語彙集(約1,500語, 1887)と、トロイツキー(В. П. Троицкий)の『チェレミス語-ロシア語辞典』(約2,200語, 1895, カザン)がよく知られている。

マリ語の文語の確立に重要な役割を果たしたのは、

1907年から1913年まで、毎年出された『マリ語の暦』(марла календарь)である。これは、マリ人の農民層向けのもので、啓蒙的な読み物のほかに、民間伝承などに基づく、詩などの文学作品も掲載された。言語的には、牧地方言と東方言が主導的役割を果たしたが、他の方言の要素もとり入れられていた。この時期には、子供向けの3巻の『マリ語読本』(марла книга)が、牧地、東、山地の3つの方言版の形で出され、内容の点でも、なかなか質の高いものであったため、マリ語で読み書きのできる世代の形成に貢献した。フォークロアの収集、出版が、19世紀の終わりから今世紀初めにかけて盛んに行なわれて、マリ語の文学の成立に大きな役割を果たした。

ソビエト体制になると、中央政府の少数民族政策が大きく変わって、マリ語の社会的地位も著しく向上した。現在のマリ自治共和国の前身であるマリ自治区が1920年に設けられ、1923年には、マリ語にロシア語と並んで、マリ自治区の公用語の資格が与えられる。最初のうちは、マリ語に共通語を定めようとする試みがなされるが、1920年代の終わり頃には、現在のような、2つの文語の並存の状態に落ちついた。1930年代には、チャバイン(С. Чавайн, 1888~1937)、シュケタン(М. Шкетан, 1898~1937)をはじめとするマリ人作家たちの活動も活発になり、小説も書かれるようになった。1931年には、「マリ言語・文学・歴史研究所」が設立され、マリ人学者による、マリ語・マリ文化の研究体制が、名実ともに整えられた。

マリ語の文語は、1930年代後半と1950年代に大きな改革が行なわれ、現在の文語の規範がほぼ確立した。それ以後も、小さな改革が絶えず行なわれて、現在に至っている。

[語彙] マリ語の語彙のうち、少なくとも、フィン・ウゴル祖語時代にまで起源をたどることのできるもの

〈表 9〉 マリ語の語彙(少なくともフィン・ウゴル祖語時代まで起源をたどることのできるもの)

人に関するもの:	иза「兄」, лүм「名前」
人体に関するもの:	вуй「頭」, шинча「目」, кид「手」, йол「足」, кыл「舌」, шүм「心臓」, мокш「肝臓」, лу「骨」, вүр「血」
動物, 植物など:	пу「木」, куэ「シラカバ」, тумо「カシ」, кол「魚」, муно「卵」, үй「バター」, кинде「パン」
代名詞:	мый「わたし」, тый「あなた」, ме「わたしたち」, те「あなたたち」, тудо「彼、それ」, тиде「これ」, нуно「彼ら、それら」, нине「これら」, кө「誰」, мо「何」
数詞:	ик「1」, кок「2」, кум「3」, ныл「4」, вич「5」, куд「6」, лу「10」
自然現象に関するもの:	шыже「秋」, теле「冬」, йүд「夜」, кү「石」, вүд「水」, ий「氷」, лум「雪」, тул「火」
形容詞:	у「新しい」, йүштö「寒い」
動詞:	илаш「生きる」, ияш「泳ぐ」, йүаш「飲む」, колаш(-ам)「聞く」, колаш(-ем)「死ぬ」, лудаш「読む」, пидаш「しぼる」, толаш「来る」, улаш「ある、いる」

〈表 10〉 マリ語の中の借用語

- インド・イラン語派から： күртньö「鉄」、меж「(動物の)毛」、мўкш「ミツバチ」、паша「仕事」、
 ўшкыж「雄牛」、шöр「牛乳」、шöртньö「金」、шүдö「100」、шудыр「星」
 チュルク語から(またはチュルク語経由)： арака「酒」、вольык「家畜」、күзен「ポケット」、
 куту「(家畜の)群」、окса「お金」、олма「リンゴ」、орва「輪、車」、пасу「野、畑」、
 патыр「英雄」、рвезе「青年」、салам「あいさつ」、сар「戦争」、шовын「せっけん」、
 шорык「羊」、эрык「自由」
 ロシア語から： колча「輪、リング」、кöршöк「つば、かめ」、купеч「商人」、күсле「ロシア琴」、
 кышал「かゆ」、немыч「ドイツ人」、печке「たる」、үстел「机」、черке「教会」、шога「犁」、
 шот「意味、わけ」、ырес「十字架」

るものには、表9のようなものがある。

借用語では、インド・イラン語派からのもの、チュルク諸語からのものに加えて、ロシア語からのものが多い(表10)。

〔辞書〕

Словарь марийского языка (Марий книга издательство, Йошкар-Ола, 1990-)——2つの文語(東マリ語、西マリ語)の語彙を収録した「マリ語・ロシア語辞典」。すべての見出し語に、マリ語の文学作品や雑誌などから採集した用例とそのロシア語訳が添えられている、本格的なマリ語文語の辞典である。

Марийско-русский словарь (Государственное издательство иностранных и национальных словарей, Москва, 1956)——東マリ文語中心の辞書。見出し語には、山地方言(西マリ語)や東方言に特有な語も載っている。巻末の文法概説は信頼がおける。

Русско-марийский словарь (Советская Энциклопедия, Москва, 1966)——東マリ語中心の辞書であるが、西マリ語の表現も必要に応じて添えられている。

〔参考文献〕

“Cheremis”, in B. Collinder (1957), *Survey of the Uralic Languages* (Almqvist & Wiksell, Stockholm)

Sebeok, T. A. and F. J. Ingemann (1961), *An Eastern Cheremis Manual* (Indiana University Press, Bloomington)

Галкин, И. С., *Историческая грамматика марийского языка. Морфология*, Часть I (1964), Часть II (1966) (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола)

Григорьев, Я. Г. (1953), *Марийский язык* (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола)

Грузов, Л. П. (1969), *Историческая грамматика марийского языка. Введение и фонети-*

ка (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола)

Иванов, И. Г. (1975), *История марийского литературного языка* (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола)

История марийской литературы (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола, 1989)

Коведяева, Е. И. (1976), “Марийский язык”, *Основы финно-угорского языкознания. Марийский, пермские и угорские языки* (Наука, Москва)

Саваткова, А. и З. Учаев (1956), “Краткий грамматический очерк марийского языка”, *Марийско-русский словарь* (Государственное издательство иностранных и национальных словарей, Москва)

Современный марийский язык: Фонетика (1960), *Морфология* (1961), *Синтаксис сложного предложения* (1961), *Лексикология* (1972) (Марийское книжное издательство, Йошкар-Ола)

Учаев, З. В., *Марий йылме, 1-ше ужаш* (1982), *2-шо ужаш* (1985) (Марий книга издательство, Йошкар-Ола)

〔参 照〕 ウラル語族

(松村 一登)